

序章 ベンデ語および本論文の背景

0. はじめに

ベンデ Bende 語には文字記述の伝統がなく、これまでにベンデ語を体系的に扱った言語学的記述が発表されたこともない。したがって、本論文は筆者自身の現地調査で得られたデータを用いた初めてのベンデ語の記述文法である。本論文以前に比較対照研究のために集められた部分的なデータは発表されているが、それによってベンデ語がいかなる言語であるかを知るのは困難である。本論文はベンデ語の初めての言語学的記述ということもあり、できるだけベンデ語の全体像を見渡せるような記述を心がけた。本論文以前の研究で集められた部分的なデータでは、Bantu 諸語内部におけるベンデ語の分類がうまくいかないという指摘もあることを鑑みるに、本論文で提示されるベンデ語の資料は今後の比較 Bantu 諸語研究に貢献できるものと考えられる。

1. ベンデに関する一般情報

1.1. タンザニア、ルクワ州、ンパンダ県の行政単位と民族構成

ベンデ人はタンザニア連合共和国 The United Republic of Tanzania, ルクワ州 Rukwa Region, ンパンダ県 Mpanda District を中心に居住している人々である。ベンデ人とほぼ同じ言語を話すトングウェ Tongwe 人はキゴマ州 Kigoma Region, キゴマ・ルーラル県 Kigoma Rural District を中心に居住している。本論文では、ベンデ語およびトングウェ語をひとつの言語とし、両者の違いは方言として扱う。人類学的にも言語学的にも、これまでベンデとトングウェは別の民族として記述されてきた。しかし調査の結果、両言語はほぼ同じであることが認められた。彼ら自身のアイデンティティーも、しばしばベンデとトングウェの両方であることが多いが、両者を纏める上位語はない。本論文では、主に Mpanda 県のベンデ人からデータを得たので「ベンデ語」とした。なお、ベンデとトングウェの違いがある場合は「ベンデ方言、トングウェ方言では…」と記す。ベンデとトングウェの違いは、1.5. でその詳細を示す。

2001 年の県庁の発表によると、Mpanda 県は(1)に示す 30 の区 ward からなり、それが 9 の郡 tarafa にまとめられる。そのうちベンデ人が特に多いのは、Kashaulili, Kabungu, Mwese, Nsimbo, Karema の 5 つの郡である。しかしベンデ人のみで構成されるという郡はなく、通常、周辺の他民族と混住している。県教育長によると、ベンデ人は特に集住を嫌い、町や村に住みたがらず、教育を施すのに特に苦労するという。

序章 ベンデ語および本論文の背景

Kashaulili 郡は, Mpanda 町およびその周辺である. この地域のベンデ人は, 周辺民族との接触が多く, 40 歳以上の世代, ないし村出身の移住者以外でベンデ語を知るものはほとんどいない. Kashauli 行政区は, 伝統的なベンデの土地であるにもかかわらず, Mpanda が行政, 経済の中心になるにつれ, ベンデ以外の民族によって占められる割合が高くなった. 一方ベンデ人は, 村や原野にこそ自分たちの伝統的生活があるとして, 町の生活を好まず, 町を離れる傾向がある. ベンデ人の占める割合が比較的高い地域は, Kabungu 郡と Mwese 郡である. 筆者は言語調査の本拠地として Mwese 郡の Katuma 区を選んだ. その理由には, Mwese 郡は Kabungu 郡よりも町から離れており, ベンデ人の占める割合が高いことがあげられる. ただし Mwese 郡内の Mwese 区は, 1964 年に Rwanda 難民のキャンプとなり, Tutsi 人を多く受け入れたため, ベンデの伝統的な生業が大きく変化してしまった. 以上のような理由から, Katuma 区が調査地の本拠地となった.

Mpanda 県の区および区ごとの主な民族, 2002 年の人口統計を(1)の表に示す. 主要な民族は, 県庁の行政官とのインタビューによって得られたものであり, 人口は 2002 年国勢調査報告書(The Republic of Tanzania 2003)からの引用している.

(1) Mpanda 県の郡, 区, 構成民族, 人口

郡	区	主要な構成民族	人口統計 (2002)
Kashaulili	Kashaulili	Fipa, Pimbwe, Ha, Nyamwezi, Bende, Tutsi, etc.	26,636
	Nsemulwa	Fipa, Pimbwe, Ha, Nyamwezi, Bende, Tutsi, etc.	7,131
	Kawajense	Fipa, Pimbwe, Ha, Nyamwezi, Bende, Tutsi, etc.	6,048
	Shanwe	Fipa, Pimbwe, Ha, Nyamwezi, Bende, Tutsi, etc.	3,511
	Misunkumilo	Fipa, Pimbwe, Ha, Nyamwezi, Bende, Tutsi, etc.	2,173
	Ilembo	Fipa, Pimbwe, Ha, Nyamwezi, Bende, Tutsi, etc.	2,382
Kabungu	Mpanda Ndogo	Bende	11,959
	Kabungu	Bende	20,741
Mwese	Mwese	Bende, Tutsi	5,122
	Katuma	Bende	7,092
Nsimbo	Nsimbo	Pimbwe, Bende, Tongwe, Rwira, Fipa	9,426
	Urwira	Pimbwe, Bende, Tongwe, Rwira, Fipa	3,973
	Mtapenda	Pimbwe, Bende, Tongwe, Rwira, Fipa	6,841
	Ugalla	Pimbwe, Bende, Tongwe, Rwira, Fipa	2,479
	Kasokola	Pimbwe, Bende, Tongwe, Rwira, Fipa	4,121
	Magamba	Pimbwe, Bende, Tongwe, Rwira, Fipa	2,830
	Machimboni	Pimbwe, Bende, Tongwe, Rwira, Fipa	11,882
	Sitalike	Bende, Pimbwe, Gongwe	7,190
Mpimbwe	Mbede	Pimbwe	22,741
	Mamba	Pimbwe	28,947
	Usevya	Pimbwe, Gongwe	16,213
	Kibaoni	Pimbwe, Gongwe	7,934

Inyonga	Inyonga	Nyamwezi, Rwira, Konongo	10,774
	Ilela	Nyamwezi, Rwira, Konongo	3,306
	Utende	Nyamwezi, Rwira, Konongo	4,503
	Ilunde	Nyamwezi, Rwira, Konongo	2,498
Karema	Karema	Bende, Holoholo, Taabwa, Tongwe	11,542
	Ikola	Bende, Holoholo, Taabwa, Tongwe	13,428
Katumba	Katumba	Tutsi, Hutu (難民キャンプ)	99,205
Mishamo	Mishamo	Tutsi, Hutu (難民キャンプ)	50,055

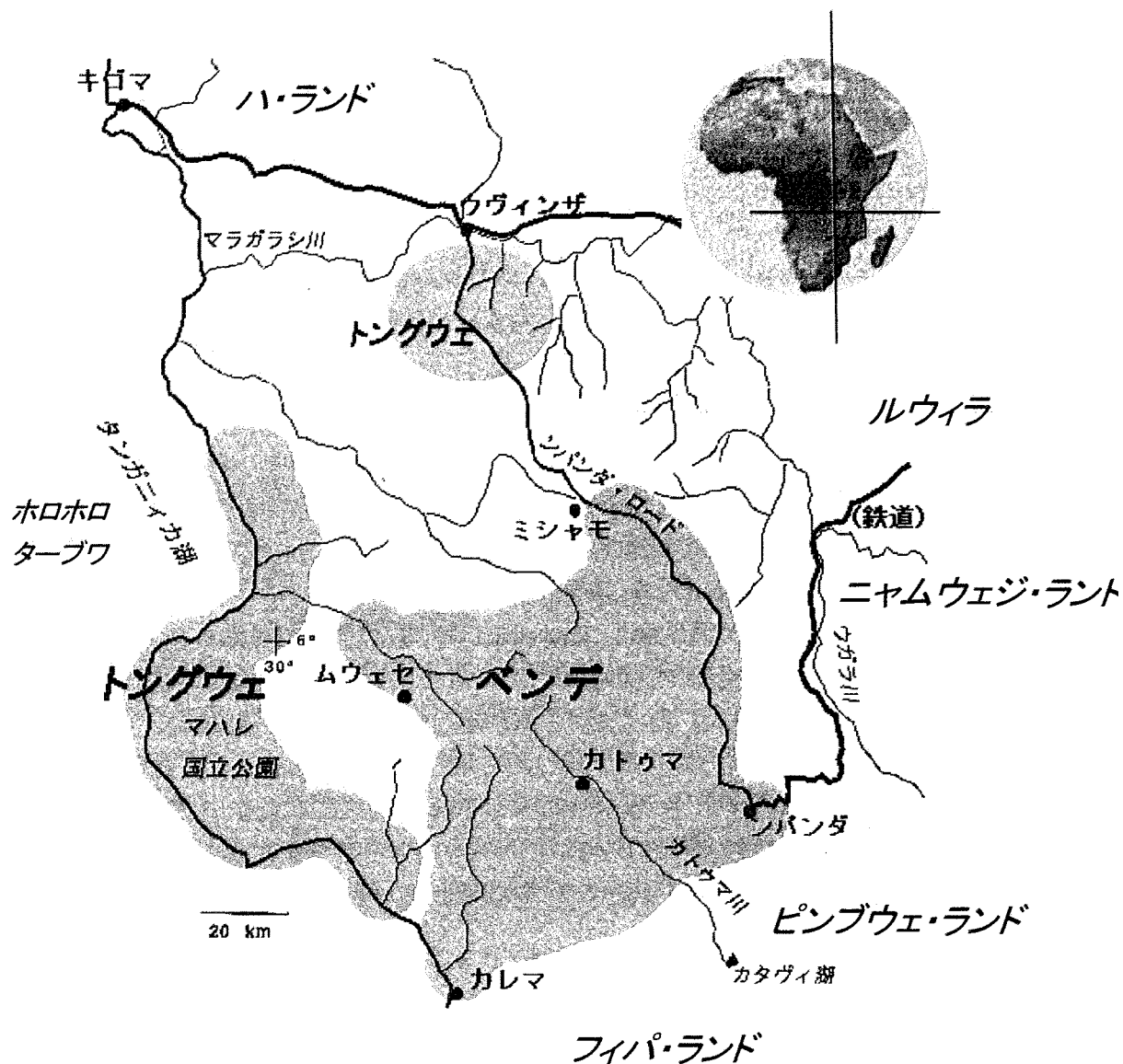
1.2. ベンデ, トングウェ・ランド地図

ベンデ, トングウェ・ランドは, おおよそ(2) の地図の点線で囲んだ部分にあたる。山がちな地域で, 乾燥疎開林と呼ばれる植生帯に属している。Tanganyika 湖畔も, かつてはベンデ, トングウェの土地であったが, 1950 年以降, 灯油ランプによる漁労が盛んになるにつれ, 周辺民族が現金収入を求めて多く移住してきた。特に Tanganyika 湖の対岸の現コンゴ民主共和国 DRC からは, DRC 国内の政情不安もあって, Taabwa や Holoholo の人々が多く移住してきている。

ベンデ, トングウェ・ランドの西の境界線は, Tanganyika 湖である。北の境界線は Malagarasi 川で, Malagarasi 川に沿って Tanganyika 湖岸の Ilagala (ベンデ語で「Malagarasi 川」の意) から Uvinza まで境界線が伸びている。Malagarasi 川は Ha 民族との境界線になっている。東の境界線は, Mpanda から Uvinza にかけて走る国道にほぼ一致する。実際はこの国道のやや東に位置する大スワンプが自然の境界線となっている。東の境界線は, Rwila, Konongo, Nyamwezi と接している。南の境界線は, 現在の Katavi 国立公園で, Tanganyika 湖岸の Karema から Mpanda にかけて伸びる道路が境界線とほぼ一致する。南西から南は Fipa; 南南東は Gongwe, 南東は Pimbwe と接している。

序章 ベンデ語および本論文の背景

(2) ベンデ, トングウェ・ランド位置

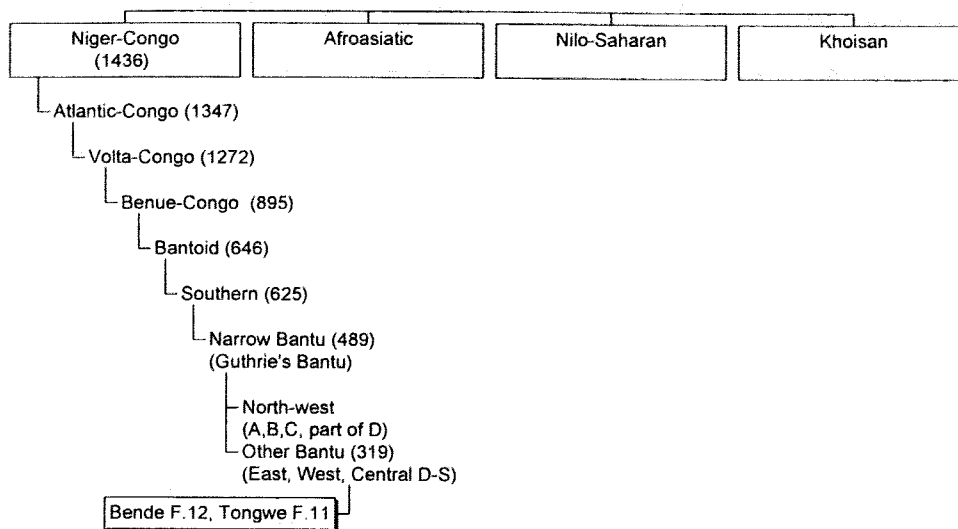


1.3. ベンデ, トングウェ語の系統と言語地図

ベンデ・トングウェ語は, Greenberg (1963) の定義するところの Niger-Congo 語族¹ の下位分類の Narrow Bantu の一言語である. なお「Bantu 諸語」というのは, Niger-Congo 語族 Benue-Congo 諸語のうち Narrow Bantu と呼ばれるものの通称である.

¹ Greenberg (1963) は Kordofan 語族 (family) と Niger-Congo 語族 (family) は対等の位置にある同系の語族であるとして, この両語族の上に Niger-Kordofan 大語族 (phylum) を立てている. しかしその後の研究で Kordofan 諸語は Greenberg が仮定した以上に Niger-Congo 語族に近いことが明らかになり, 現在では Niger-Congo 語族の 1 分派として取り扱うことになっている (清水 1988). そのため本論文では「Niger-Congo 語族」という名称を用いる.

(3) Greenberg (1963) のアフリカ諸語の分類(括弧内の数字は言語数)



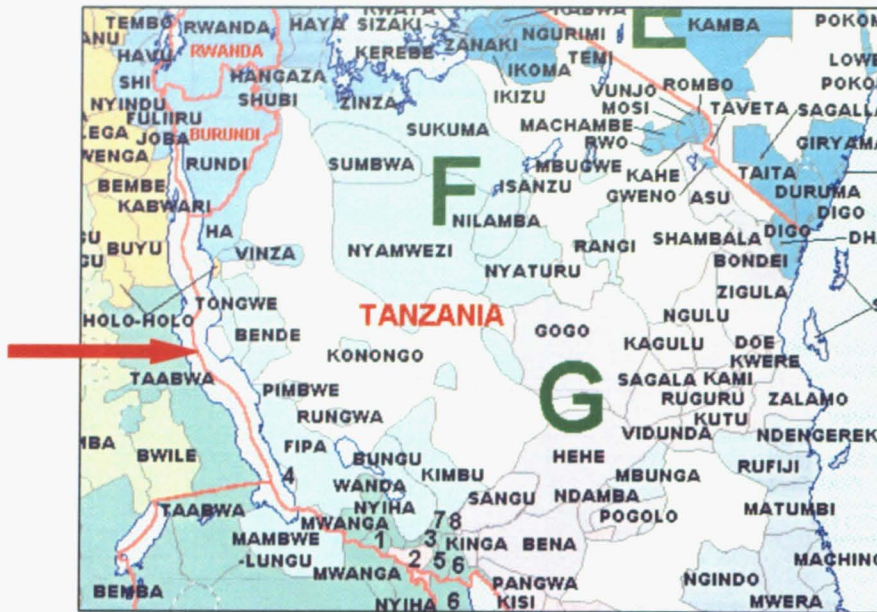
Guthrie (1948) の「Bantu 諸語」の言語分類²によると、ベンデ語、トングウェ語は別個の言語とされており、Nyamwezi 語などと同じ F ゾーンに分類され、ベンデ語が F.12、トングウェ語が F.11 となっている。F ゾーンの 10 番台は、現在、この 2 つのみである。

SIL International (2001) は、Guthrie (1948) に基づいた Bantu 諸語の言語地図を提供しており、(4)はその一部である。ベンデ、トングウェ語は左上の矢印先にあたる。地図上はベンデ、トングウェ語の東側に接触する言語はないように見えるが、実際は、Nyamwezi 語(F.22)との間では Rwila 語と Katumba 村に住む Rwanda, Burundi 難民の話す Rwanda 語(J.61)、Rundi 語(J.62)と接触している。Rwila 語については未分類で記録もないが、Nyamwezi 語に近い言語だという。Konongo 語は Nyamwezi 語の一方言である(Gordon ed. 2005)。

また主要都市 Mpanda は、伝統的にはベンデの土地だが、現在はベンデ語、Fipa 語、Nyamwezi 語、Pimbwe 語、Gongwe 語が混在している。地図上、Mpanda はベンデ語地域になっているが、Mpanda が経済、行政の中心になるのに伴い、周辺の大民族が流入している。Bryan (1959) は、南に位置する Fipa 語をベンデ、トングウェと同じグループとしたが、現在は M ゾーンに再分類され、Fipa 語が M.13、Pimbwe 語は M.11 とされる(Bastin, Coupez & Mann 1999)。Gongwe 語については、未分類で記録もない。Gongwe 語はベンデ語話者がベンデ語に最も近いと言う言語だが、筆者による予備的な語彙、文法調査によるとベンデ語よりも Pimbwe 語に近いようである。ベンデ・ランド南に広がるこれらの言語群は、Tanganyika 湖と Nyasa 湖の間の言語グループである Corridor グループの一部とする分類もある(Walsh & Swilla 2001)。トングウェ、ベンデ・ランドの西側の白い部分は、現 Mahale 国立公園にあたる。かつてはベンデ、トングウェの伝統的な土地であったが、現在、ここに定住する人はいない。また、ベンデ・ランドの南側の白い部分は Katavi 国立公園にあたる。現 Katavi 国立公園はベンデ、Gongwe の伝統的な居住地であったとされるが、やはりここに定住する人はいない。

² Guthrie (1948) 以来、Bantu 諸語はアルファベットと 2 桁の数字で分類される。アルファベットはゾーンをあらわし、さらに近い言語を 10 番台、20 番台…のように数字で示す。この分類は個別言語の研究が進むにつれ、適宜修正、再分類が行われているが、ベンデ語、トングウェ語については、これまでのところ変更されていない。

(4) ベンデ語周辺言語地図(SIL International 2001, 部分)



1.4. ベンデ語の話者人口

現在、国勢調査において民族名を調査することはないので、ベンデの正確な人口を示すのは不可能であるが、Gordon(2005)の *Ethnologue 15th Edition* では、ベンデ語話者が 27,000 人(1999 年)、トングウェ語話者が 13,000 から 15,000 人の間(2001 年)とされる。両者を単純に合算すると、ベンデ、トングウェ語話者は 40,000 から 42,000 人程度ということになる。

Legère(2002)は、1948 年、1957 年および 1967 年の国勢調査による民族ごとの人口を示し、それにタンザニアの平均人口増加率(2.75%/year)を 1967 年の話者数にかけた数字がおおよそ現在の話者数となる、という計算法を提案している。この計算法によれば、2005 年現在のベンデ、トングウェ語の話者数は 59,211 人ということになる。この資料では、ベンデは 1948 年が 8,836 人、1957 年が 7,792 人、1967 年が 8,269 人、トングウェは 1948 年が 8,513 人、1957 年が 8,746 人、1967 年が 12,851 人である。

また Joshua Project(2005)による統計では、ベンデ人とトングウェ人を合わせて 42,790 人程度(内訳はベンデ:20,380 人、トングウェ:22,410 人)という数字を提示している。

ただし、ベンデ、トングウェ人の人口については、一個人がベンデとトングウェのどちらのアイデンティティを持っている場合があるため、ベンデ人とトングウェ人を別々に示した数には、重複がある可能性がある。

さらに、ベンデ、トングウェ人と名乗る人々がすべてベンデ語、トングウェ語話者というわけではない。タンザニアでは 1967 年の「Arusha 宣言」以降、Swahili 語が国民生活の隅々にまで行き渡りつつあり、民族語を話さなくなる傾向がある。したがって、話者人口は「自分はベンデである」と認識している数よりもさらに少ない。特に 1967 年以降に産まれた 40 歳以下の若い世代でベンデ、トングウェ語を自由に扱える人は、都市ではほぼ皆無に等しく、村でもそれほど多くはない。筆者はベンデ、トングウェ語の話者人口は 2 万から 4 万人程度と見積もっている。

なお Legère(2002: 179-180)は、1948 年から 1967 年にかけてのデータから、特に消滅の危機に瀕している言語として、ベンデ、トングウェ語をあげており、早急な調査、記述が期待されている。

1.5. ベンデとトングウェ

現在、ベンデ人とトングウェ人は、それぞれ別の民族アイデンティティーを持っている。トングウェ人は、ベンデ・ランドの西・北を取り囲むように居住している。古い先行研究では、この二つのグループは別の民族と区別されていた。ただし「トングウェはベンデの一部」(Murdock 1959: 359)としたり、「トングウェとベンデは非常に近い言語」(Guthrie 1948)というように、お互いの類似性は認識されていたようである。

その後の研究で、ベンデとトングウェはほぼ同質の文化・言語を持つことが明らかになってきた。ベンデとトングウェがかつては同じものであったということは、その文化の面から西田(1973: 134-138)、伊谷(1977b: 19-21, 1984a: 702)が確認している。言語についても、ベンデ語とトングウェ語の基礎語彙の比較により、両者が同じものであることがほぼ確認できた³。基礎語彙の語彙統計の比較では、200の基礎語のうち、93%が一致、それも同系の一致というだけでなく、声調、音価ともに完全に一致している。

ベンデ、トングウェの人々に直接、自己意識を訊ねると、やはりそれぞれ別の自称を名乗る。ただし、お互いが文化的にも、言語的にも近い、ないし同質であるという意識も高い。

1.5.1. ベンデ、トングウェ人の共通点と相違点

ベンデと名乗る人々とトングウェと名乗る人々の共通点は言語および文化である。言語は、基礎語彙など形態上、ほぼ一致する。また文化においても、挨拶法、チーフダムのシステム(ムワミ *mwami* 制)、呪医 *mífumó* のシステム、真の狩人 *mijéghé* の存在、伝承などが共有されている。集住を嫌うこと、優れた狩人であること、などの自己像も両者に共通している。一方、両者の相違点には、地理的なもの、そして氏族名がある。まず同じ集落において、ベンデ人、トングウェ人の混住はない。つまりベンデとトングウェという名称は地理的な区分でもある。

またベンデ、トングウェの人々が持つ氏族名も、おおよそ地理的な分布をしており、ベンデ系の氏族、トングウェ系の氏族に分かれる。ただし、ベンデないしトングウェという自称は氏族名よりも地理的なものの方が決定的らしい。実際、トングウェ・ランドからベンデ・ランドに移住したベンデ語インフォーマントの Kaboko 氏は、移住に伴い、自称をトングウェからベンデへと変えている。伝承によれば、ベンデ系の氏族は Ha を出自とし、トングウェ系の氏族は Tanganyika 湖を渡ってきた人々だという。(5)は、インタビューによって得られた氏族名である。

³ トングウェ語の基礎語彙調査は、Uvinza 出身の女性 Adija Saidi さん(1964 生)の協力を得て、2002 年 8 月に行った。

(5) 氏族名

ベンデ系 (ハ・ランド出身)	トングウェ系 (コンゴ出身)
<i>kábhújé</i>	<i>ikúnda</i>
<i>kálinde</i>	<i>mukwála</i>
<i>kasaála</i>	<i>múléngó</i> ⁵
<i>lúbhendé</i>	<i>múlongá</i> ⁶
<i>líhindá</i>	<i>mújóngá</i> ⁷
<i>mpáhó</i>	<i>mutááhya</i>
<i>mukwála</i> ⁴	<i>mughánsa</i>
<i>múkasá</i>	<i>ngéla</i> ⁸
<i>ndúbhúlá</i>	
<i>nkólóngó</i>	
<i>ntámbi</i>	

1.5.2. 地名からの考察

地名は保守的で、変化が遅いといわれている。トングウェ・ランドをあらわす *bhútongwé*, ベンデ・ランドをあらわす *kábhendé* について見てみると、ベンデ及びトングウェ・ランドには、伝統的な行政単位として、小規模なチーフダム *sihughó* が多数存在し、各チーフダムには *mwami* と呼ばれる首長がいる。この *sihughó* 単位の地名は、伝統的なベンデ、トングウェ語では、14クラス接頭辞 *bhú-* をとる。14クラス接頭辞 *bhú-* は、*sihughó* 以上のレベルである他民族の土地名についても用いられる。ところが、ベンデ・ランドの伝統的な名称 *kábhendé* は12クラス接頭辞 *ká-* をとる。名詞12クラスには多くの精霊名が含まれ、それがさらに水域名、山などの名称に用いられる。この水域名、山の名称が集落名になることが多く、12クラス接頭辞 *ká-* の地名も多数ある。ただし12クラス接頭辞 *ká-* の地名の多くは、*sihughó* よりも小さな単位の地名として用いられている。

トングウェ・ランドの *bhútongwé* という形が、より *sihughó* の地名らしい一方、ベンデ・ランドの *kábhendé* という形は、チーフダムの地名としては逸脱している。このことは「トングウェ」という地名の方が本来的で、「ベンデ」の地名 *kábhendé* は、元来もっと小さな土地単位の名称であったのが、次第に大きな土地単位の名称になったという可能性を示唆する。

しかし、接頭辞の区別はあくまで傾向であり、すべての地名について接頭辞14クラスの *bhú-* のつくものが、大きな土地単位に、接頭辞12クラスの *ká-* が小さな土地単位というわけではない。ベンデ、トングウェは、焼畑農耕を主生業として生活し、数年後ごとに集落もろとも移動する(伊谷 1977c: 444)という、移動の多い生活が伝統的であり、こうした移動の結果、*bhú-* や *ká-* は大きな土地単位、小さい土地単位のどちらにも用いられることとなった、というのも考えられる。

⁴ ベンデ、トングウェ両方にある氏族。

⁵ Bemba 出身といわれる氏族。

⁶ 主に Kalya に住み、Holoholo 出身といわれる氏族。

⁷ Taabwa 出身といわれる氏族。

⁸ Lungu 出身といわれる氏族。

1.5.3. ベンデ人へのミッションの関与

元来は小さな土地を指していた可能性の高い「ベンデ」*kábhendé* という名称が、現在、民族名ともいえる大きな単位を指すようになったのには、ベンデ人へのカトリックのミッションが関与しているようである。

ベンデ、トングウェ人は、かつては伝統的宗教を信仰していたことが知られている。しかし1840年以降、Ujiji にアラブ商人が定住し始めた頃から奴隷商人が流入し、多くのトングウェ人は奴隷狩りを逃れるためにイスラム教へ改宗し、一方19世紀末以降、多くのベンデ人はカトリックへ改宗した。トングウェ族は現在でもほとんどがイスラム教徒である。

Karema のカトリックのミッションの Mali 神父(1975)の記録によると、White Fathers と呼ばれるカトリックのミッションは1885年に Karema(ベンデ語では *bhúlemá*⁹)に布教の拠点を定め、Mpanda にかけて布教活動を行った。ミッションがこのとき、Karema で出会った人々が「ベンデ」であったという。ミッションはセミナーでのベンデ人師弟の教育を行い、またミッションの Atiman 医師¹⁰はベンデの首長の娘と結婚するなど、それ以降、カトリックはベンデ人に深く浸透していった。ミッションが通った Karema から Mpanda にかけての一带は、ちょうど現在のベンデ・ランドと一致する。つまり「ベンデ」という名称は、ミッションによって広められたものではないか、と考えられるのである。ミッションは当然ながら植民地政府との繋がりも強く、1891年にはドイツ植民地政府の役所 Goma が Karema に設置されたことから、Karema から Mpanda にかけて居住する人々の民族名は「ベンデ」である、ということが対外的にも定着していったようである。ただしベンデを名乗る人々がすべてカトリック教徒というわけではなく、ベンデ人の中にもイスラム教徒はいる。

1.5.4. ベンデ、トングウェの社会制度

以上、ベンデ、トングウェの地名の起源について述べたが、このような歴史的変遷が考えられるにも関わらず、彼ら自身は、ベンデ、トングウェの地名の違いについてあまり意識的ではなく、外部の人にその違いをたずねられて、初めて意識したという人も多い。かつては1つのグループであったであろう人々が、ベンデとトングウェという2つのグループに分化し、現在、ベンデ、トングウェと名乗る人々が、この変化に特に意識的でない、という事実について、考察したい。

この問題については、ベンデ及びトングウェの社会制度にその原因の一端を求められるのではないか。ベンデ及びトングウェの伝統的な行政単位は *sihughó* というごく小規模な多数のチーフダムで、各 *sihughó* には首長がいるのだが、伊谷(1977b: 20-21, 1996: 176-185)も述べているように、そのチーフダムをまとめるパラマウント・チーフ(大首長)は存在しない。このことはベンデ及びトングウェを総称する上位語がないことにも繋がる。このような状況が、ベンデ人とトングウェ人が自然に分化を起こし、さらに彼らがそれについてあまり意識的にならない原因なのではないかと考えている。

最近では、トングウェに比べてベンデの占める地理的範囲がますます広がっている。現在、ミッシ

⁹ Karema という地名は、White Fathers のミッションが Tanganyika 湖対岸の Kalemie から来たことからつけられた。*bhúlemá* は当事、Tanganyika 湖周辺の奴隷貿易(特にコンゴからの奴隷)の一大拠点であった。

¹⁰ Adriano Atiman(1866-1956)は、スーダンに生まれ奴隷として捕らえられたが、ミッションにより解放され、イタリアで医療助手としての教育を受け、生涯 Karema のカトリック病院で現地のベンデ人のために積極的に医療活動を行った。その功績は協会から高く評価され、現在 Dar es Salaam の聖ジョセフ教会にはアティマン記念館 Atiman House が併設されている。

序章 ベンデ語および本論文の背景

ンの教育の成果もあり、ベンデ人の国会議員や大学教授、地方行政官などといった人材が、徐々に中央へ進出するようになり、「ベンデ」の名称の方が優勢になってきているようにも見受けられる。その一方で、トングウェは 1974 年以降この地に適用された集団移住政策や、Rwanda, Burundi からの難民の流入により、Tanganyika 湖沿いのトングウェと Uvinza 周辺のトングウェと 2 つのグループに分化し始め(小川 2002: 191-205)、次第に存在感を失っているようにも見える。

2. 調査方法

2.1. 調査期間

言語調査期間は、2000 年 7～8 月のうち約 1 ヶ月半、2001 年 6～8 月のうち約 1 ヶ月、2002 年 8～11 月のうち約 3 ヶ月、2003 年 8～10 月のうち約 2 ヶ月、2005 年 1～2 月の 2 ヶ月である。本論文は、計 9.5 ヶ月の調査で得られたデータに基づく。

2.2. インフォーマント

2000 年には、Dar es Salaam に住むベンデ人女性、Rita Nyundo 氏(1944 年生)に協力してもらい、予備的な言語調査を行った。氏は、ベンデ・ランドから離れて 40 年になるが、夫もベンデ人であり、夫婦、家族の間で話されている言語は常にベンデ語である。Rita Nyundo 氏は、Mpanda 県の現在の Sibwesa 村の一部である Mwikang'ombe の生まれである。氏族は *lihindá* である。氏はベンデ語と Fipa 語、Pimbwe 語、Gongwe 語の違いに敏感であった。

2001-2003 年は、Mpanda 県の Katuma 村にて行った。2001 年からは、主に Hamisi Kaboko 氏(1965 年生)、Yasini Mashaka 氏(1961 年生)の両氏に協力してもらっていた。両氏とも現在は Katuma 村に居住し、お互い、同じ民族で同じ言語を話すと認めているが、Kaboko 氏は、トングウェ・ランドの Kalya 村の生まれで、氏族も *múlongá* というトングウェ系である。彼の家族は、Kaboko 氏が小学校に上がる前にベンデ・ランドの Katuma 村に移り住んだ。Kaboko 氏は生まれこそトングウェ・ランドであるが、現在はベンデ・ランドに住んでいるので、現在のアイデンティティーはベンデ人だという。Mashaka 氏は、ベンデ・ランドの Mwese 村の生まれで、小学校入学とともに、Katuma 村に移り住んだ。Mashaka 氏のアイデンティティーは純粋なベンデであるという。氏族はベンデ系の *lihindá* である。両氏とも、Swahili 語とのベンデ語の 2 言語話者である。それ以外の言語は知らないが、Mashaka 氏は Nyamwezi 語とベンデ語の違いに敏感であり、Kaboko 氏はベンデ方言とトングウェ方言の違いに敏感であった。

さらに 2005 年には、再び Rita Nyundo 氏および夫の Raymond Nyundo (1934 年生)に協力していただき、最終的なチェックを行った。Raymond Nyundo 氏は、現在の Sibwesa 村と Kasekese 村の中間に位置する Misanga 集落の出身である。氏族は夫婦ともに *lihindá* である。Raymond Nyundo 氏は 1949 年以降、ベンデ・ランドを離れて暮らしている。Nyundo 夫妻のベンデ語は、現在 Katuma 村で得られたデータよりも、やや古風であった。

基本的に、語彙調査、文法調査、テキストの収集・分析は Mashaka 氏に担当してもらった。Kaboko 氏は、村でも有名な猟師で、動物名や植物名といった自然の知識に通じており、特にその分野で協力していただいた。また発音のチェック、トングウェ方言との比較においても、貴重な情報を提供していただいた。

2.3. 調査本拠地 (Katuma 村)

調査の本拠地, すなわち言語データの主な出所である Katuma 村の地名は, 村の中心を流れ Katavi 湖に至る Katuma 川に由来する. イギリス統治時代は, Landamilumba (*láncámilumbá*) と呼ばれていたが, これはベンデ人が精霊の宿る木とする *milumbá* (単数は *múlumbá*) が這いめぐる場所, というのが語源である. *milumbá* の木が這いめぐる場所とは首長が居を構える場所のことで, 現在の Katuma 小学校裏がそこにあたる. Landamilumba は伝統的なチーフダムの単位である *sihughó* の一つであり, 現在 Katuma 村の中心部にあたる. 現在の Katuma 村は3つの伝統的チーフダム (*bhusyámba*, *láncámilumbá*, *bhuúnta*) にまたがっている. *bhusyámba* は, Katuma 川より北東の Mpembe 村にかけての地域, *bhuúnta* は Katuma 村西部にあたる. 現在 Landamilumba の首長 *mwami* は不在である. 現在の小首長 *mútwalé* である Kamaji 氏の期が熟したと住民が判断すると, 所定の儀礼を経て首長に昇格することになるが, まだその時期はおとずれていない.

この地に初めて外国人が足を踏み入れたのは, 村の最長老である Kabahandila 氏 (2003 年没) の記憶によると 1919 年である. 第一次世界大戦でドイツが破れ, この地がベルギー軍の支配下に入った際, 敗走するドイツ軍が Landamilumba を通過したという. その後 1921 年に Tanganyika 全土がイギリス国連信託統治領となると, Landamilumba にも小学校と診療所が設置された. 1961 年に Tanganyika が独立し, 村の名前が Katuma となった. 翌 1962 年には, ケニアからマウマウの乱を逃れてきた Kikuyu 人数名が Katuma 村に定住した. しかし Kikuyu 人は 2, 3 年農耕に勤しみ, 財を築くとすぐにこの地を離れたという. 1964 年には, Katuma 村から 40 キロほど西にある Mwese 村に, Rwanda からの Tutsi 難民が押し寄せ, 国連による難民キャンプが設置された. その際, Mpanda と Mwese を結ぶ道路が整備され, 途中にある Katuma 村の交通の便がよくなった. 1972 年頃からは, 国家の集団移住政策 Ujamaa で Chagga 人が Mwese 村の Lugonesi 集落に殖民を開始したが, Katuma 村に移住してくるものはほとんどなかったという. 1974 年以降は Kigoma 県および Mpanda 県にも集団移住政策 Ujamaa が適用され, Katuma 村や Sibwesa 村に, それまで原野でバラバラに生活していたベンデ人たちが集められたが, 集団移住政策の終焉後はかつての居住地に戻る人々も多い. 1994 年に, Katuma 村南部の Nsimbo で金塊が見つかる, 小規模ながらゴールドラッシュとなり, 現在 Sukuma 人男性などが, 季節労働にやってくるようになった.

Katuma 村には, 最近でこそ季節労働の鉱夫がやってくるようになったものの, あまり他民族が入った歴史がない. ベンデ・ランドの南西に住む Gongwe や Pimbwe, Fipa 人との通婚以外は, ほとんど他民族との交流がないといってよい. その点で, 特にベンデ語の調査に適した場所でもある.

2.4. 調査票

調査には, 主に以下 2 種類の語彙調査票を用いた.

- | | | | |
|---------|-----------------|---|---|
| 東京外国語大学 | アジア・アフリカ言語文化研究所 | 1966 | 『アジア・アフリカ言語調査票(上)』東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所 |
| 湯川恭敏 | 1979 | 「バントウ諸語語彙調査票試案」『アジア・アフリカ言語文化研究 17』東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所 | |

『アジア・アフリカ言語調査票(上)』は, 1000 語の調査票, 湯川(1979)は, Bantu 諸語調査のためにデ

序章 ベンデ語および本論文の背景

ザインされた 2356 語の調査票である。なお湯川(1979)には、短期調査のための 200 語の基礎語彙がある。ベンデ語周辺の言語の共通語彙を調査するには、この基礎語彙 200 語を利用した。

また先行研究に、動物学、植物学の立場から、トングウェ語の植物名、動物名に関する詳細な調査、記述、同定がなされている。これらの資料を利用して、筆者のベンデ語インフォーマントが同定できるものに関しては、言語学的記述をした。

(植物名)

伊藤(編)(2002) 「付録 1 調査域内で同定された木本性植物のリスト」、『マハレのチンパンジー《パンスポロジー》の三十七年』, 西田利貞, 上原重男, 川中健二(編), 京都大学学術出版会, pp.472-479

(動物名)

伊谷(1977c) 「トングウェの動物誌」, 『人類の自然誌』, 伊谷純一郎, 原子令三(編), 雄山閣, pp. 441-535

文法調査には、以下の調査票を補助的に用いた。

湯川(1978) 「バントゥ諸語文法調査票試案」『アジア・アフリカ文法研究 6』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

またテキストの収集、分析には、もともとベンデ語のテキストだけでなく、Swahili 語からベンデ語への翻訳も行った。その際に用いたのは、以下の Swahili 語のテキストである。

Taasisi ya elimu (1984) *Kusoma kitabu cha pili*. Tanzania Publishing House
 Taasisi ya elimu (1995) *Kiswahili, Darasa la Nne*. Oxford Educational Books. Tanzania
 Ngahyoma (1975) *Kijiji Chetu -Michezo ya Kuigiza-*. Tanzania Publishing House

3. 本論文で用いる略号、表記法

3.1. 略号一覧

略号	説明 (日本語)	説明 (英語)	実現形の一例 ¹¹
ADJ	形容詞語幹	Adjective	
ANT	完了辞	Anterior	-ilé
APP	適用形	Applicative	-il-
ASS	随伴辞	Associative	-ná-
AUG	指大形	Augmentative	
BEN	受益	Benefactive	
C	子音	Consonant	

¹¹ 実現形は、略号が指し示すものが数例のみのものをあげた。

略号	説明 (日本語)	説明 (英語)	実現形の一例 ¹⁾
CAUS	使役短形	Causative short form	-i-
CAUSL	使役長形	Causative long form	-isi-
CL	名詞クラス	Noun class	
CON	連辞	Connective	-á
CONJ	接続詞	Conjunction	
CONS ₁ , CONS ₂	結果辞 ₁ , 結果辞 ₂	Consecutive _{1, 2}	-ká-, -á-
COP	繫辞	Copula	ni, te-
DEM	指示詞	Demonstrative	
DIM	指小形	Diminutive	
DIS	遠辞	Distal	-ká-
ENC	後倚辞	Enclitic	
Eng	英語	English	
EPx	数詞接頭辞	Numeral prefix	
EXS	伸張辞	Extensive	-al-
F	下降声調	Falling tone	
FUT	未来辞	Future	-lóó-
GER	動名詞	Gerund	ku-, ká-
H	高声調, 高型声調	High tone	
HAB	習慣辞	Habitual	-kóó-
HP	歴史的過去	Historical past	-li-
IFUT	近未来辞	Immediate future	-láá-
IMP	他動状態辞	Impositive	-ik-
IND	直説法辞	Indicative	-a
INT	強制辞	Intensity	-isi-
IPR	命令辞	Imperative	-á (SG), -é (PL)
IRR	非現実	Irealis	-náá-
ITR	多回辞	Iterative	-agh-
ITS	強調辞	Intensive	-isi-
ITT	強意辞	Intentional	-âng-
IV	冒頭母音	Initial vowel	a-, e-, i-
L	低声調, 低型声調	Low tone	
NEG ₁ , NEG ₂	否定辞 ₁ , 否定辞 ₂	Negative 1, 2	te-, -si-
NOM	名詞化辞	Nominalizer	-i, -u, -o
NPx	名詞接頭辞	Nominal prefix	
PASS	受動辞短形	Passive short form	-u-
PASSI	受動辞長形	Passive long form	-ibhu-
PAST	過去辞	Past	-a-
PB	Bantu 祖語	Proto-Bantu	
PERS	継続辞	Persistent	-si-

序章 ベンデ語および本論文の背景

略号	説明 (日本語)	説明 (英語)	実現形の一例 ¹⁾
PL	複数	Plural	
PN	固有名詞	Proper noun	
POS	所有詞	Possessive	
PPx	代名詞接頭辞	Pronominal prefix	
PROC	前倚辞	Proclitic	
PREP	前置詞	Preposition	
PRN	代名詞	Pronoun	
PST	位置辞	Positional	-am-
REC	相互辞	Reciprocal	-an-
RED	重複形	Reduplication	
REF	再帰代名詞接頭辞	Reflexive	-li-
REL	関係辞	Relative	
REV	反対辞	Reversive	-ul-
SBNEG	接続法否定辞	Subjective negative	-í
SEPi	自動分離辞	Separative intransitive	-uk-
SEPt	他動分離辞	Separative transitive	-ul-
SEM	達成辞	Semelfactive	-ná-
SG	単数	Singular	
SPx	主語接頭辞	Subject prefix	
STAT	自動状態辞	Stative	-ik-
SUBJ	従属法辞	Subjunctive	-e
Sw	スワヒリ語	Swahili	
TAM	テンス・アスペクト・ムード辞	Tense-Aspect-Mood	
V	母音	Vowel	
VEB	動詞化辞	Verbalization	-h-
VS	動詞構造	Verb structure	
-	形態素境界	Morphology boundadry	
#	語境界	Word boundary	
=	倚辞境界	Clitic boundary	
~	異形態	Variant	
/	自由交替	Free variant	
>	通時的变化	Diachronic change	
→	共時的交替	Synchronic alternation	

数字は名詞クラスの番号および人称をあらわす。数字のみの場合は名詞クラスを、数字と SG, PL を併記する場合は人称をあらわしている。

3.2. 表記法

本論文のベンデ語の例には、音声記述など特に必要な場合を除いて、簡易表記法を用いる。ベンデ語は、これまで表記の習慣がなく、特に定められた表記法もないので、本論文で提案する表記法がはじめてのものとなる。本論文の表記法は、言語学的な記述のできるものであると同時に、現地コミュニティにも受け入れられるものを目指すものである。

表記法を主として利用するのは、言語学者およびその言語の現地コミュニティだが、両者が表記法に求めるニーズは根本的に異なる。言語学者は当該言語の記述のために、弁別的な要素をすべて表記に反映させようとする一方、現地コミュニティの母語話者は、必ずしも弁別的でなくてもよいので、基本的には現地コミュニティが求める表記法の方が簡便である。一方、純粋に言語学的表記であれば音素表記でもよいのだが、母語話者は音韻規則を理解したうえで表記するわけではないので、異音表記については現地コミュニティが必要とする表記の方が煩雑になる可能性もある。ただ両者のニーズが違うからといって、ベンデ語について言語学者用の表記法と母語話者用の表記法の2つを作成するのは現実的ではないので、ベンデ語コミュニティに受け入れられやすい簡便な表記法を作成するようにした。文字の種類は、ベンデ語コミュニティのメンバーのほとんどがすでに知っているラテン文字が選ばれる。さらに、東アフリカ諸語の表記では、IPA の精神を受け継ぐ一文字一音価の標準アフリカ文字を基にするコミュニティと、Swahili 語式の慣習的な表記を用いるコミュニティがある。タンザニア連合共和国では1964年の独立以降、Swahili 語化を国家的に推進し、Swahili 語による初等教育を徹底したため、壮年層の男性の多く、そして青年層の男女のほとんどが Swahili 語を読み書きできる。したがって、Swahili 語式の一文字一音価にこだわらない慣習的な表記法を基にした方が、表記法の読み書きの習得が容易と考え、ベンデ語の表記法は Swahili 語表記法を基にすることにした。(6)は、筆者がベンデ語を調査する過程で、インフォーマントと表記法についての協議、手紙のやり取りで用いた表記を反映させたものである。母音については、ベンデ語は Swahili 語と同じ5母音体系なので、Swahili 語の正書法同様、*a, e, i, o, u*を採用する。また二重下降母音も Swahili 語同様、接近音 *w, y*と母音で、*wa, ya*のように綴る。

(6) ベンデ語表記法

a) 子音

音価 (IPA)	表記法	音価 (IPA)	表記法
[p]	<i>p</i>	[z]	<i>z</i>
[b]	<i>b</i>	[h]	<i>h</i>
[β]	<i>bh</i>	[m]	<i>m</i>
[t]	<i>t</i>	[n]	<i>n</i>
[d]	<i>d</i>	[ɲ]	<i>ny</i>
[l]	<i>l</i>	[ŋ]	<i>ng'</i>
[c]	<i>ch</i>	[w]	<i>w</i>
[j]	<i>j</i>	[j]	<i>y</i>
[k]	<i>k</i>	[mp, mb]	<i>mp, mb</i>
[g]	<i>g</i>	[ɱf]	<i>ɱf</i>
[ɣ]	<i>gh</i>	[nt, nd]	<i>nt, nd</i>

序章 ベンデ語および本論文の背景

[f]	<i>f</i>	[ŋk, ŋg]	<i>nk, ng</i>
[s]	<i>s</i>		

b) 母音

a, e, i, o, u

一方、ベンデ語には鼻母音があらわれることがあるが、母音に鼻母音と非鼻母音の対立があるわけではなく、ある限られた環境にのみで鼻母音化したものである。この鼻母音は、母語話者にとっては必ずしも表記されなくてもよい情報であるが、言語学的な記述では母音の上に補助記号 [̃] をつけてあらわす。

(7) 鼻母音(鼻音化による)

nahũliiké

N-aN-hũd-ik-ide

SPx1SG-PAST-hear-STAT-ANT

私は(今日)聞いた

なお声調記号は、(8)のように補助記号で記す。基底声調が低声調の場合は [à] のように示す。

(8) ベンデ語の声調表記

高	<i>á</i>
低	<i>a, à</i>
上昇	<i>ǎ</i>
下降	<i>â</i>

3.3. 例の表示法

本論文の例は、(9)のように基本的に1行目に本論表記法に基づく原文(表層形)を、2行目は形態素分析したものを音素表記で示し、3行目は文法解説、4行目は和訳を示す。形態素分析、文法解説の行の [-] は形態素境界を、[=] は倚辞境界を、[#] は語境界を示す。

(9) 例の表示法

原文	<i>njiilé</i>	<i>míkunyaágha</i>
形態素分析	N-ji-idé	mu-ku-nyaag-a
文法解説	SPx1SG-go-ANT	NPx18-GER-bath-IND
和訳	私は水浴びをしに行く	